
perverted love

赤羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

p e r v e r t e d l o v e

【Nコード】

N 6 9 9 5 N

【作者名】

赤羽

【あらすじ】

告白してきた晒谷京介をいつもの言葉で振った。彼は次の日から、学校に来なくなった。その日から私は彼が気になり始める。しかし、三ヶ月後、彼の代わりのようにやってきた転校生の女の子は、自らを晒谷京介と名乗り

男 女の性転換あり。見た目はGL。中身はNL。

「生まれ変わって女になったらもう一度来てください」

と、いう文句も定着し、私に告白してくる人も減った頃に、何を思ったか告白してきた人は普通にかっこよかった。頭も良さそう……じゃない、良いんだこの人。私の数人上にたまに名前を見る。ついでに言えば、クラスメイトだ。名前は……晒谷……サラシヤなんとかさん。

けれど、噂とか聞いてないんだろうか、私についての。主に、今言った言葉について。

「駄目ですか」

「駄目です。あなたが生まれてきた瞬間から射程外。ごめんなさい」
私はとつとと去ることにした。曲がり角で少しだけ振り向く。男は結構シヨック受けてるみたいで、その本気さはちょっと嬉しいなと思った。

しかし、本当に不思議。私のどこにそんなモテる要素があるのかしらね。気になる。

「ねえ、私きれい？ 輝いてる？」

「何、お前いつから口裂け女になったの。それともあれか、お揃いの人か」

場所変わって自宅にて。私は私と顔が似てるくせに彼女いない歴

「年齢の兄と対峙している。いや、それは私と同じだけど、兄は告白すらゼロらしいので。」

「裂けてるわけでもお揃いでもないよ兄さん」

これも謎のひとつだ。普通にかっこいいのにね、お兄ちゃん。私は好きだよ、お兄ちゃんみたいだな。お風呂上がりで髪がしっと濡れているところとか、色気あっていいよね。

「それよりさ、お前未だにあれで告白断ってるってマジ？」

私はそれについて考えていたわけだから、何を指しているのかはすぐに分かった。

「おお、すごくマジです」

「あれ、付き纏われるの避ける為に俺が考えた方便だったろ」

そう、そうなの。私、別に女の子しか好きじゃないってわけでもなくて、断る口実にしていただけなの。別に男も嫌いではないから、今日告白してきた人も良いなとは思った。

でも、なんか、違う気もしてきて。

「でもね、ほら、あれよ。……嘘から出た実？ 女の子って、いいよね」

「嘘オオオ！？」

凄い顔して叫ばれた。珍しいね、お兄ちゃんがそんな大声出すの。でもいいじゃない、妹が女の子が好きでも。

「多分ね、私、男が普通に女の子が好きってくらいには好きだよ。」

AVとかみたら勃つかも」

「おいやめる俺の妹に対するイメージ崩すな。妹ってのは……純粹なんだ、多分」

「やーねえ、気持ち悪いこと言わないで」

くすくす笑って、私はお兄ちゃんの膝から某少年漫画雑誌（今日発売）を奪い取る。けれどお兄ちゃんは頭を抱えて、俺のせい……？なんて呟いて自問自答していた。我ながらナイスなタイミング。ベッドの上に寝そべって最初のページを開いた。

「兄さんこそさ、彼女作ればいいのに」

「俺はどうでもいいのお前だよお前」

お兄ちゃんはやっと気にしすぎだと思う。私に構いすぎ。私はもう構って構ってーな子供なんかじゃないのよ。嬉しいけれどね。

「よくないよ！ 兄さんが大学行っても彼女でできなかったら私、いよいよ人がモテる基準わかんない。なんでモテないわけ？」

「それはあれだ。俺、学校ではいてもいなくても同じような暗いキヤラで通してるから」

「は？」

わけがわかりません。

「……初耳。それ、キヤラで？」

「キヤラで。俺、待ち時間とかに人と話すの嫌いなんだよね。嫌いなだけで苦手なわけじゃないけど」

お兄ちゃんの性格。誰ともでも仲良くなるフリは得意。人と話すの嫌い。面倒臭がり。暗いのがフリだとしても、ろくな性格じゃないみたいね。

好きな漫画だけ読む派の私は雑誌を早々に閉じた。なんだか、疲れたな。告白されるのに何処かに行くのだけで、私はかなりのエネルギーを消費しているような気がする。眠りたい。でも眠っちゃいけない。

「兄さん」

「うん？」

「勉強しよ。忘れそうだけど受験生だよ、兄さん」

私よりも勉学優先しようぜ、兄貴。

この世の終わりのような顔された。駄目よ、兄さん。勉強は継続じゃないと。

次の日、晒谷京介は欠席していた。先生の言葉で名前の発覚した彼は、しばらく休むらしかった。

私のせい？ いやいや。でも、やっぱり、あんな断り方は酷いのかな。告白したこともないから、分からない。そもそも、好きになっただけじゃない。

でも、フツた次の日に休まれるのは少し気にかかる。気になっってしまう。風邪かな。復活したら話しかけてみようか。駄目だ、気を持たせるのも悪い。このままでいい。私も大概、兄の事を言えないほど面倒臭がりだ。

一ヶ月が経った。ここまで来ると、どう考えても風邪なんかじゃない。疑問に思った生徒が先生に尋ねたところ、

「外国で手術をするらしい」

とのこと。……んな馬鹿な。病気、なんて、そんな素振りひとつも見えなかったのに。いえ、仲が良いわけでもないけれど。『手術するからその前に』説が濃厚になってしまった。でも、外国に行つてするほどの手術って、何。死ぬの？ 外国といえば、ドナー？ でも、その場合って、見つからなかったら？

急に怖くなった。死ぬかもしれないと、それを予期して告白してきた？ あんな簡単に、定例文で断って良かったんだろ。私は、好きという言葉の意味さえ、ひとつも拾わなかったのに。

三ヶ月が経った。

外国に入院しているのなら見舞いに行くことは困難だったし、先生も詳しいことは話してくれなかったから、かわいそうに、彼は忘れられようとしている。でも、仕方ないよね。人間の記憶力って本当、クソだから。忘れたくないことは尚、簡単に忘れられるし。かという私も、中学の時の事を忘れてしまった口で。ああ、残念だったね。割と大切だったはずなのに。

軌道修正。それにしても、こんなに気にかかっているのは私だけなんだろうか。寧ろ何故こんなに気になっているんだろう。ただ告白されたという理由だけでだろうか。もしかしてもしかすると、私は恋をしているんじゃないだろうか。

……まさかね。そんな、好きになった理由もはつきりしない、都合のいいものが恋のわけがない。私が作った罪悪感をすぐ替えているだけ。

転校生が来た。彼が消えて、約三ヶ月と三日だった。転校生は女の子らしかった。

彼がいた場所を、転校生が埋めてしまう。足りなかった人数を、違う人が満たしてしまう。これでプライゼロ。それで、おしまい？

そういう、学校特有のシステムがたまに怖いと思う。人数で強制的に分割されてしまうのは、私たちを無視しているみたいで。三ヶ月前と、今日からは、数の上でさしたる違いがないのだ。確かにあるはずの違いも薄れ、それは現実にすら影響を及ぼしてしまう。

なんてね。戯言は自重しようか。

転校生は可愛かった。大人しそうで頭良さそうだった。ちょっと、晒谷君に似てるよね。女の子なら好みだった。なんだか、凄く寂しい。

私、変だ。いつもなら話かけに行くところだけど、いつも通りにいれる自信がない。落ち着かない。今日は部活を休んで早く帰ろう。それで、考えることは放棄して、眠ってしまいたい。

「春日井さんだよね」

6時間目の直前、俯せる私に話し掛けてきたのは、転校生の子だった。なんで、私に。

「黒川、さん？」

「うん。あの、話したいことがあって。放課後屋上に来てほしいの」
黒川美沙。なんか、良い響きの名前だと思う。っていうか、声まで可愛いしこの子。

して、私は何故に呼び出しを食らったんだろうか。目をつけられた？ いやいや普通逆でしょう。尋ねようとしたけれど、ちょうどチャームが鳴って私たちは引き裂かれてしまった。くそう、謀ったな。今日の授業は6時間目までだから、その後清掃をして放課ということになる。清掃前を狙ってみるか。しかし、理由が分からない故に私は本日最後の授業中に悶々と考え続けるはめになった。仕方ないじゃない、そういう性格なのよ。……ああ、そうか、彼のも単に性格が影響してるのか。

再び落ち込んでしまった。どうしてこうもネガティブになるんだろう。どこかに叫びたい。私、いままで一回も彼のことにについて、誰にも話していない。溜め込みすぎかもしれない。穴でも掘ってみようか。そこに叫んだら、私の酷さはばれてしまうかな。

残念なことに、ごたごたする清掃前には話す機会とは与えられなかった。かくして、私は直接、予備知識もないままに屋上へ向かうこととなる。安全のため、解放されている屋上は一つに限られるから、迷うことなく私は階段を上がった。だって、ねえ。此処までくると、もう逃げられないでしょう。

屋上は空白だった。騙された？と一瞬思ったけれど、私は比較的早く終わる廊下掃除だったから、先についたんだ。多分。

それで、なんで私が呼び出されたんだろうか。屋上。屋上……？ 基本誰も来ないよ、冬から春の境のまだ寒いこの季節には。

所謂、嫌われ夢展開とかないよね。具体的に言っと、呼び出されて「アンタ目立ってて邪魔なのよ！」で、ナイフで自分を切り裂いて「春日井さんが！ 私なにもしてないのに……」と言い、「お前

そんな奴だったのかよ！」とかで私が虐められるみたいなやつです。恐ろしい。な、ないよね。私そんなに目立ってもないし。いや、でもナイフとか持ってたらどうしよう。

そんなことを考えていたから、私はドアが開く音に必要以上に驚いてしまった。

「ごめんなさい、遅れちゃって……」

「動かないで！ 手を上げて！」

あ、私の馬鹿。

「え……？ ど、どうしたの？」

丁寧に黒川さんは両手を上げて下さった。申し訳ない。なので、一応両手に何もなかったことを確認した。いや、なので、はおかしいな接続詞が。

「ごめん何でもない。下ろしていいよ」

「え、うん」

変な人ってレッテル張られたらどうしようか。いえ、既に告白の返事によって、校内でおかしい人だろうけど。

「それで、私に言いたいことって、何？」

黒川さんは躊躇うように唇を閉ざした。ちらちらと、迷うような視線を送りながら、話したそうとはしない。

「あの、春日井さん」

「はい」

「一応聞いてみるけれど、私、誰だか分かる？」

質問の意図がわかんないです。

「え、黒川美沙さんじゃないの？」

「ええと、あの、」

ここでもまだ言い淀むようにしていたけれど、黒川さんは戸惑った顔で微笑んで自分を指差した。

「一応、晒谷京介です」

「……は？」

転校生の言葉は理解しがたいものだった。

「……晒谷、くん？」

「はい」

目の前にいるのは、少し似ている感じはするけれど紛れも無く女の子なのに。実は男で、しかも、ずっといなくなっていた晒谷くんだと？

「嘘……」

「本当」

「証拠……なんて言っても、晒谷くんと話したことあまりないからな……ごめん信じれない」

「だろうね」

例えば、私が告白された時どういう対応をしていたとか、そんなものは彼が黒川さんに話していれば答えられるし、そもそも大抵の場合同じ対応をしているので意味がない。有名すぎる。

だけど、とりあえず、聞いておかなければならないことがある。

「あの、あのね、一応聞いてみるけどね？」

「うん、何？」

黒川さんは首を傾げる。その動作は可愛い女の子そのもので、疑わせる要因にも、努力の成果にも取れる。

「仮に黒川さんイコール晒谷くんってことを信じたことにして聞くんだけど、何で、女になったの？」

彼、もしくは彼女は、あっさりと、

「春日井さんが言ったんだろ？ 生まれ変わって女になって来てく
ださい、って」

「………ですよね」

2回目。私は頷くしかない。私が言ってしまったんだ。私が、本
気半分冗談半分のいい加減な気持ちで言った言葉が、こんな影響を

与えてしまった。

言った。そう、言ったけれど、まさか女の子になるとは思わないじゃない。いや、本当に晒谷くんなのかまだ断定できるわけでもないけど。何なんだろう。私は彼女を信じていいんだろうか。考えれば考えるほど思考が停滞する気がする。

ああ、でも、これだけは言わせて。

「晒谷くんのつ馬鹿！」

黒川美沙は震えてきゅつと肩を引つ込めた。くそう可愛い。

「え、か、春日井さん……？」

「黒川さんが晒谷くんだとしうんだからね、いい？ 馬鹿ですよ晒谷くん、なに、あたしのために性別変えたりなんかしてるの。

それで、晒谷くんの人生とか変わっちゃったんだよ、分かっている？ 後悔しないって言い切れるの？ 例えば、ね、友達ともきつと今までみたいにはいられないんだよ。家族と決裂してない？ 女って大変よ面倒臭いよ？ それを踏まえてよく考えて答えなさい。あたしに、そんな価値があるの！？」

「あるよ。後悔だつてしない」

即答されて言葉に詰まる。これが激昂したような口調ならきつとさらりと流すことができただろうに。思いのほか、言葉は冷静で尚且つ目も落ち着いた色のままだ。

「……………よく考えて、つて言った」

「そんなことなら女になる前に腐るほど考えた。……………ああ、でも、春日井さんが振り向いてくれなかったら後悔するかも」

黒川さんは心から不安といった顔をしている。演技？ そんな風には見えないけれど、簡単に判断できる話ではない。

「……………狡い」

「ごめん、嘘だよ。僕が勝手にしただけだから。性別で断られるのは、納得がいかなかったから」

責めてるように聞こえるのは、気のせいではないはず。

「うん……………ごめんなさい……………」

視界が歪んで、言葉がうまく吐き出せない。私は、どうすればいいの？ こうして戻ってきた意図って、何。

「え、違っ、泣かせたいわけじゃないから！ 泣かないで、春日井さん。ごめん」

「でも、私自分が悪いって思うし……私、好きって言われてもその意味をひとつも考えなかった。責められたって仕方ない。……私だって、晒谷くんがいなくなってからずっと、考えたんだから」

「考えてくれたんだ？」

ああ、もう、そんな嬉しそうに言わないでよ。

「だって、晒谷くんが、振った次の日から休むから……先生は病氣って言うし、外国行ったとか、って、でも戻ってもこないし！ メアドも、晒谷くんの友達とかに聞いたんだよ。でも、送っても宛先なくて戻ってきたって」

「……うん、心配かけてごめん」

そう言った晒谷くんの次の行動に叫びそうになった。心臓がバクバク言ってる。嘘だ、だって、黒川さんは女なのに。いや、体だけかもしれないけれど！

でも、どうしてこんなに、心臓が鳴るの。

「……っく、だ、抱きしめれば解決するなんて思うなよ！」

「はいはい。でも、好きな子が泣いていたら抱きしめたいって思うよ」

「……！」

言葉を失って、荒い心音のまま溜息をつく。

「……狡い」

「二回目だね」

近い距離の囁き。

笑った顔。

それに落ち着くなんて、安らぐなんて、あまりにも自分勝手だつて、知ってるつもりだけ。

伝えたくてどうしようもなくなるような、胸の内に抑えるには余

りにも溢れすぎるような、そんな想いに、私は唐突に侵食される。
ねえ、晒谷くんも、こんな気持ちだった？

「私ね、凄い自分勝手に都合のいいこと言うよ。晒谷くん、怒るかもしれない。あと、黒川さんが私を騙してるとしても構わないから、言うけれど、」

「……嬉しいの」

「晒谷くんが好きって言うてくれて、すごく嬉しいの。今までのどんな告白より、ずっと、嬉しい。だから、あのね」

自分の語彙のなさに泣きたくなる。胸が締め付けられるような、そんな痛みの理由はそれだけではないけれど。

「……私、きつと、晒谷くんのことが好き」

私よりほんの少しだけ背の高い、黒川美沙の腕が私を抱く。黒くて澄んだ目がじつと私を見ている。その黒目に映った顔は、酷く醜い。

「体が女でも男でもいいの。晒谷くんが好き」

もしかすると『黒川美沙』が私を騙しているだけかもしれない。『晒谷京介』を手酷く振った私を罵りにきたのかもしれない。好き、だなんてそんな言葉で彼に与えた影響の責任をすべて持てるとは勿論思っていない。

なんて私は我が儘なんだろう。自己嫌悪でいっぱいになる。多分、好意に囲まれていた心はなよよしているし、その癖、自分勝手に人をたくさん傷つけた。それに気づくと、私はそんな自分が、嫌いになった。

でも、もしかしたら。

私が酷い人間だって知りながら、こうまでしてくれた晒谷くんだったらきつと、醜い私を全部含めて好きになってくれるんじゃない

か。晒谷くんだったら、私は心から信じていることができるんじゃないか、って。

……そんな期待は、甘い幻想？

「ありがとう」

私を抱きしめる手は震えている。晒谷くんもずっと不安だったんだということに、今更気づく私。

申し訳ないけれど素直に謝るのも気恥ずかしくて虚勢を張る。

「ずっと一緒にいてくれないやだからね」

「案外可愛いこと言うよね、春日井さんって」

背中を叩いておいた。調子に乗るなよ！

「……痛い……」

でも痛そうに私を見ってくるのは可愛い美沙で。ああもう、そんな可愛い顔で見られたら言うことなんでも聞いちゃいそうになる。逆らえないな、私。

もし、こんな声で、顔で、一緒にいたいとか言ってくれたら、堪らない。

「……でも、僕も一緒にいたい」

「……………」

きゅっくっく。

「晒谷くん」

「はい」

「可愛い大好き結婚して」

はっ、私は何を。いやいや、美沙の外見が私の好みすぎるのがいけない。でもって、希望通りのことさりとちゃっかうのもない。

「……はは、プロポーズされちゃった」

きょとんとした顔をした晒谷くんはくすくす苦笑した。それから、微笑んだまま、私の左手を取る。

「いいよ。僕、戸籍は男のままだから。結婚しようか」

「もう、だから晒谷くんはもう少し考えるべきだって。成人したらまた言って」

「それじゃあ、その時まで春日井さんを予約してます」

「されてあげようじゃない。だから晒谷くんも予約されなさい」

「春日井さんの、そういうところ好きだ」

高圧的に言っただのにさらりと受け入れてくれちゃったから、何も言えなくなった。嬉しいけどね。嬉しいけど。

「晒谷くんってちよっとおかしい……？ 性的嗜好が」

「さあ……多分、僕、割と盲目的に春日井さんが好きなんだと思うよ。何をされたって、例えば黒川美沙が晒谷京介だって勝手に公言されても、ずっと好きだ」

絶句した私に文句は言えないでしょう。だって、クラスでクールでイコール地味だった晒谷くんがこんなこと言ってくるなんて。

「晒谷くんって、意外と私にベタ惚れ？」

「今更気づいた？」

イマサラ。確かに今更だ。こんな想いに今まで気づかなかったなんて、私、相当、鈍感かもしれない？

……うーん……

「ね、キスしよっか」

「どうしたの、いきなり」

「考えるの、疲れたから。本能に身を任せようかと思いました、まる」

「たまに変なこと言うよね。まあ、いいけど………で、する？」
「して？」

晒谷くんの顔は少しだけ赤くなって、私はそんな彼のさらさらの

黒髪に指を絡ませる。近づいてきた顔に私は静かに目を閉じた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6995n/>

perverted love

2010年10月8日12時27分発行